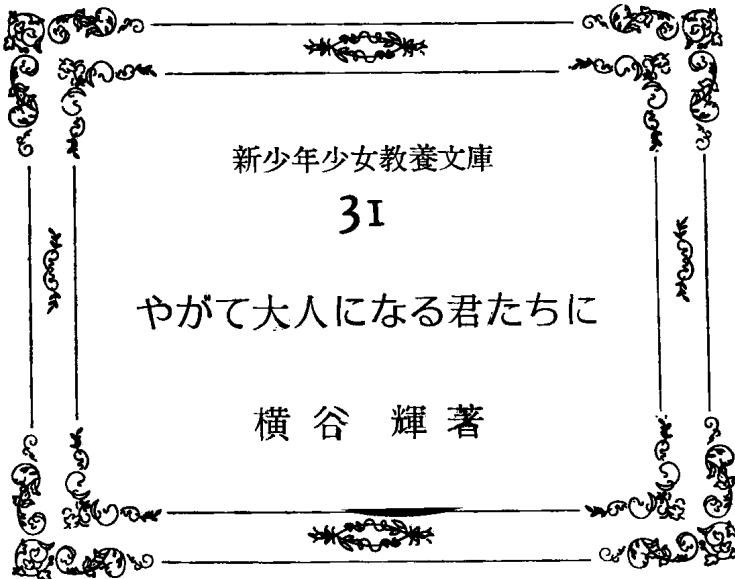


やがて大人になる 君たちに

横谷輝著





新少年少女教養文庫

31

やがて大人になる君たちに

横谷 輝 著

牧書店発行

914 やがて大人になる君たちに

横 谷 輝

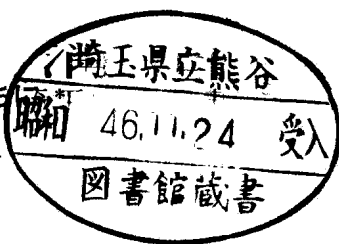
牧書店 1971

256p 22cm

定価 580円

* やがて大人になる君たちに

新少年少女教養文庫 31



1971年 6 月15日 第 3 刷発行

著 者 横 谷 輝◎

印刷 東洋経済印刷K. K.

発行者 牧 芳 枝

製本 佐 抜 製 本 所

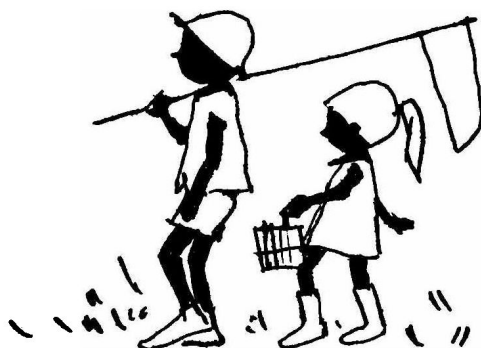
発行所 株式会社 牧 書 店

* 162 東京都新宿区揚場町 1 電話 (269) 2081~4 振替・東京196483 *

(分) 8395 (製) 06031 (出) 7909

現代は激動げきどうの時代であるといわれています。そのような社会のなかで、君たちはいろいろなできごとにであい、疑問ぎもんをもったり、なやみをいだいたり、ときには怒おこったり、悲しんだり、よろこんだりしながら生きています。そして、そのたびに、自分のことや他人のことや世の中のことを思い、どう判断はんだんし、どう行動したらいいのかについて、迷まよったり苦しんだりしているにちがいありません。

ここでは、そうした問題のいくつかを、文学作品や児童文学作品をとおして、さぐろうとしました。その問題にたいするわたしの考えについては、君たちにもいろいろと意見があると思います。自分の考えをたいせつにしながら、問題をしっかりとつきとめ、君たちがやがておとなになるための力をたくわえてほしいと思います。そのことによって、君たちの考えが深まり、高まっていくことを、なによりも願っています。



・ 平和への願い	1
壺井栄著「二十四の瞳」………	
・ 積極的に生きること	23
せつきよくてき	
有島武郎著「一房のぶどう」………	
・ 個性をはばむものへの抵抗	43
こせい	
志賀直哉著「清兵衛とひょうたん」………	
し が なおや	
・ 「みかん」と「レモン」の美しさ	63
あくたがわりゆうのすけ	
芥川龍之介著「蜜柑」・ 梶井基次郎著「檸檬」………	
みかん	
かじい もとじ ろう	
れもん	
・ 信じるということ	79
ださいおさむ	
太宰治著「走れメロス」………	
・ 不正なるものへのたたかい	101
なつめ そうせき	
夏目漱石著「坊っちゃん」………	



・「試験・宿題なくそう組合」をつくる	
ふるた たるひ 古田足日著「宿題ひきうけ株式会社」	121
・非人間的なるものへの抵抗	
た みやとらひこ 田宮虎彦著「異端の子」	141
・差別をゆるさない人間	
す みい 住井すゑ著「橋のない川」(第一部)	165
・平凡で偉大な生き方	
さいとうりゆうすけ 斎藤隆介著「三・三」	191
・民族の独立のためのたたかい	
おつこよしこ 乙骨淑子著「八月の太陽を」	211
・あとがき	234
・資料	237

平和への願い

— 壺井 栄 著 —
つぼ い さかえ

「三十四の瞳」
ひとめ
—

明ちゃんところのおばあちゃんは
もういない。

九月十二日

ぼっくりなくなってしまった。

八十三歳になるまで

明治・大正・昭和と

ほそい小さなからだで

苦しい時代の中をくぐりぬけてきた。

おばあちゃんが生まれたのは

明治十一年七月十七日。

きびしい女性のむずかしい礼儀^{れいぎ}も

ぎっしり頭につめこんで

飯岡^{いゝおか}へおよめにきた。

そして自分の子どもや近所の男たちを

毎日戦争^{せんそう}に送った。

夜は

電気を消したまっくらな家の中で祈^{いの}った。

「子どもたちがぶじでありますように」

「早く終戦^{しゆうせん}になりますように」と。

昭和二十年の暑い夏^{あつ}

広島^{ひろしま}と長崎^{ながさき}のむざんな姿^{すがた}をのこして

おばあちゃんの願いどおり

戦争は終わった。

子どもたちもぶじであった。

しかし、日本はやぶれたのだ。

衣類、食糧、そして働き手と

すべてのものがとぼしく、苦しい生活のなかを。

おばあちゃんは

「わしら、えろう楽しみはねえけど

広子のよめさん姿だけ見てえぞな」

しわのよったやさしい手で

私の頭をなでてくれた。

でも

明ちゃんとこのおばあちゃんは

もういない。

衣類と食糧と働き手と

すべてのものがもなくなったのに

おばあちゃんはなくなってしまったのだ。

昭和三十五年九月十二日

おばあちゃんはなくなってしまった。

これから

うんとらくになるというのに――。

〔中学生 私たちの生活と意見〕より〕

これは、「おばあちゃん」という題で、岡山県おかやまの鈴鹿すずか広子ひろこさんという中学生がかいた詩です。

この詩には、明治・大正・昭和と生きぬいてきたひとりのおばあちゃんがうたわれています。が、印象いんしょう的てきなのは、その一生が戦争せんそうによってふちどられていることです。この「明あきちゃん」のおばあちゃんおばあちゃんは、戦争せんそうのなかを生きてきたのです。そして、昭和二十年八月十五日に、日本が戦争せんそうにやぶれ、やっと平和な時代がおとずれたのに、その平和のよろこびを十分にあじわうこともなく、おばあちゃんおばあちゃんはぽっくりなくなってしまったのです。

ここには、近代日本の女性の、悲しいすがたがにじみでています。この「明あきちゃん」とこのおばあちゃんおばあちゃんが生きてきた道は、そのまま近代の日本が、歩んできた道でもあるということができます。

日本は明治以来、ひとくちにいつて、ヨーロッパの先進国であるイギリスやフランス、ある

いはアメリカのような文明国の仲間いりをしようと努めてきました。後進国から先進国への道を、国をあげていっしんにつきすすんできたのです。

ところが、その文明国になるためにとられた政策は、“富国強兵”という上からおしつけてくるものでした。“富国強兵”というのは、かんたんにいうと、近代的な大工業をさかんにし、それをもとにして強い軍隊をつくりあげ、なによりもまず国の力というものを強力なものにしようという考え方です。

もちろん、こうした考え方は、今日から見るとまちがったところが多いのですが、無理もない面もありました。

そのひとつは、後進国のおくれをとりもどし、できるだけ早く先進国に追いつくためには、下からの意見をまとめ、力のもりあがりを待っていては、時間がかかりすぎるので、国の力によって金をだし、近代工業をつくりあげるほうがてっとりばやかかったからです。

いまひとつは、明治のはじめごろには、日本のまわりには強い軍隊と軍艦を持ったアメリカ、イギリス、ロシア、フランスなどがいて、すぎがあると日本をせめて植民地にしようとなねらっていたのです。

このような情勢のなかで、文明国にならなければならなかった日本は、社会や政治のしくみを封建的なものから、近代的、民主的なものにつくり変えていくよりもさきに、まず近代工業

を發展はつてんさせ、強力な軍隊ぐんたいをつくりあげていくほうがたいせつだという考えが大勢たいせいをしめたのです。こうした考え方にたいして、少数の社会主義しゃかいしゆぎを信じている人たちは反対しようとしましたが、その考えを変えていくほど大きな運動を起こすことはできませんでした。それは政府せいふが権力りよくを持って、そういう人たちの動きを、おしつぶしてしまつたからです。

このようにして、“富国強兵ふこくきやうへい”の道は、日清戦争にっしんせんそう、日露戦争にちろせんそうとつながり、戦争せんそうに勝つたたびに、日本の工業力は大きくふとっていきましました。だが、その結果けつかは、軍隊ぐんたいを動かしている軍人や、それと結びついた政治家せいじか、資本家しほんかが勢力せいりよくをのばしていよりはじめ、日本を自分たちの思うようにしようとするようになりました。日本を文明国にし、世界の大国にしたのは、戦争せんそうを勝利しりにみちびいた自分たちのおかげだとうぬぼれていたのです。日本はやがて、軍国主義ぐんこくしゆぎの道を急速きゅうそくにころがりだし、太平洋戦争たいへいようせんそうから敗戦はいせんへとたどりつくことになってしまつたのです。したがって、太平洋戦争たいへいようせんそうとその敗戦はいせんは、日本の政府せいふが明治のはじめにとつた“富国強兵ふこくきやうへい”という政策さくのとうぜんの結果けつかでした。

しかし、なかには、その“富国強兵ふこくきやうへい”によつて、日本はわずか一〇〇年たらずの間に、まがりなりにもイギリス、フランス、アメリカと肩かたをならべることのできる文明国になつたのだから、その功績こうせきはみとめなければならぬという考え方にたつ人もいます。

たしかに、日本は世界の歴史でもかつてないほどのスピードをもつて、後進国から先進国へ

の転換^{てんかん}をなしとげることができました。太平洋戦争^{たいへいようせんそう}の敗戦^{はいせん}という大きなつまずきがあったにもかかわらず、今日、日本は世界一流の大工業国になり、世界のどの国にも負けないものをいくつかつくりだしています。

このような発展^{はつてん}のものは、日本の国民がひとつになって、国力を高めるためにつくしたからだと思います。外国から自分の国をまもるために、“富国強兵^{ふこくきやうへい}”にがんばったからでしょう。その意味では、“富国強兵^{ふこくきやうへい}”は日本を文明国にする上で、あるプラスのやくわりをはたしたといえます。

だが、だからといって、“富国強兵^{ふこくきやうへい}”への道が正しかったということとはできないのです。明治以来、日本の政府^{せいふ}がとってきた“富国強兵^{ふこくきやうへい}”の政策^{せいさく}は、つぎつぎと戦争^{せんそう}を引き起こし、たくさん^{わが}の若い人たちを死に追いやりました。そればかりではありません。中国や朝鮮^{ちやうせん}、東南アジアの人びとの生活を打ちこわし、土地をとりあげたりしたのです。この戦争^{せんそう}がもたらした、さまざまな悪は、けっしてみとめることができないと思います。日本が文明国になるためには、やむをえない犠牲^{ぎせい}であったといって、ゆるされることではないのです。

“富国強兵^{ふこくきやうへい}”という上からの政策^{せいさく}は、多くの人びとに、いろいろな無理をしました。一部の人は、そのために金持ちになったり、貴族^{きぞく}になったりしましたが、大部分の人は不公平なめにあって、まずしい生活をおくらなければならなかったのです。まずしい生活のなかで、肉

体をすりへらしてはたらき、病氣になつて死んでいった人もたくさんいます。低い賃金で、ひどい労働をさせられた人は、おそらくかぞえきれないでしょう。そのなかでも、女の人はずねに下積みの生活を、しんぼう強くたえなければならなかったのです。"明ちゃんのおばあちゃん"も、そのなかのひとりだったといえます。

しかし、なんといつても、いちばん大きな犠牲者は、戦争にいつて死んだ人たちです。また、戦争のために、深い痛手を受けた人びとです。明治以来、つぎつぎに引き起こされた戦争によって、日本人のほとんどは大きな傷あとをのこしています。それは、"お国のため"という、日本を文明国にする大義名分によって、見すごされてきました。人間の自由平等をみとめあうという文明をつくりだすために、人間の自由が圧迫され、人間の生命がいともかんたんに犠牲にされたのです。

このように、近代日本の歩んできた道はそのまま戦争への道でした。それだけに、戦争がおかしてきた罪悪や非人間性については、いままでにも、いろいろなかたちで告発されてきました。文学作品のなかでも、数多く語られています。子どものための文学のなかには、「戦争児童文学」とよばれる作品がたくさんかかれています。

ここでとりあげようとする、壺井栄の「二十四の瞳」も、そうした戦争の傷あとを描いた作品です。

この作品は、いままでに映画化されたり、テレビに放送されたりして、君たちもよく知っていると思います。「ニュー・エイジ」というキリスト教関係の雑誌に、一九五一年（昭和二十六）二月から十一月まで連載され、一九五二年（昭和二十七）に光文社という出版社から出版されました。

長編作品のため、くわしく内容を紹介することはできませんが、そのあらすじだけを、ごくかんたんにのべておきましょう。

昭和三年四月四日、瀬戸内海べりのまずしい岬の村の分教場に、若い女の先生が赴任してきました。

村の子どもたちは、四年までが分教場にいき、五年になると片道五キロの本村の小学校にかようことになっていました。その分教場の先生は、むかしからうんと年よりの男の先生と子どものように若いおなご先生がくることにきまっていました。

さて、そのおなご先生は太石先生といい、洋服を着て、自転車にのって学校にきたために、子どもも村の人たちもびっくりし、大さわぎしました。

「こんどのおなご先生は、洋服着とるぞ。」



στανγκιτ.

「おなごのくせに、自転車にのったりして。」

おなご先生のうわさは、たちまちのうちに村じゅうに広まっていきました。

この大石先生は、岡田磯吉、竹下竹一、徳田吉次、相沢仁太、森岡正、川本松江、西口ミサ子、香川マスノ、木下富士子、山石早苗、加部小ツル、片桐コトエという十二人の一年生を受け持つことになりました。はじめて教壇にたった大石先生は、子どもたちのひとみが輝いているのを見て、このひとみをにごしてはならないと考えました。

ところが、村では大石先生にたいする批判の声が高くなり、本校にかよう子どもたちは、大石先生に「小石先生」というあだ名をつけたりました。

二期期がはじまった日。岬の村はあらしに見まわれて、ひどく痛めつけられました。大石先生はかるい気持ちで、災難を受けた子どもたちの家を、子どもといっしょに見舞に出かけましたが、それがかえって村の人たちに誤解され、怒りをかう結果になってしまいました。その上に、帰り道で落とし穴におち、足をくじいてしまったのです。

十日すぎても、半月たっても学校にすがたを見せない大石先生を、子どもたちは心配してきびしく思いました。そんなある土曜日、学校の帰り道で、

「おなご先生の顔が見たいな。」

と、小ツルがいいだしたのをきっかけに、みんなむしように先生に会いたくなりました。そし